HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	原始的蓄積論についての一考察
Author(s)	石垣, 博美
Citation	北海道大學　經濟學研究, 17, 1-26
Issue Date	1960
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31063
Type	bulletin (article)
File Information	17_P1-26.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

原始的蓄積論についての一考察

石垣博美

一

資本主義社会成立史のうえで、マルクスの『資本論』の随所に展開されている歴史的分析の多くは、[1]現在にいたつてもなお傾聴にあたいする諸命題をふくんでいる。原始的蓄積論は、なかんずく、封建体制から資本主義体制への過渡期を解明する古典的研究のひとつとして、いまでは学界の共有財産になつている。しかしまた、他方では、資本主義成立史上この原始的蓄積論がもつところの意義の評価において、さまざまな見解があらわれてきて、マルクス自身の考えに相当の疑いをもつ意見もあらわれている。ここでは、しかし、マルクスの原始的蓄積過程論が、具体的な歴史的分析においてどの程度の妥当性なり有効性なりをもつているか、という、いわば歴史理論としての有効性の当否を、問題にするつもりはない。このような問題を解決するひとつの手懸り、あるいはその予備作業のひとつとして、原始的蓄積論の、マルクス経済学体系の形成上での意義、および『資本論』体系のなかでの方法的な意味を、検討するにとどめたいとおもう。

かえりみるに、『資本論』第一巻二四章の『原始的蓄積過程』の論述は、その内容じたいが比較的に平明な歴史的事実によつて埋められているためか、従来は、第一巻全体におけるこの章の意義とか第七篇「資本の蓄積過程」中での

この章の位置とかいう問題は、あまりとりあげられていない。けれども、この原始的蓄積論の評価の仕方は、諸家のあいだで大きなくいちがいをみせている。たとえば、ローゼンベルクは、原始的蓄積論をもつて、「資本論第一巻全体の諸研究の一般化」だと称し、「全体の論理的完成」[2]だといつている。他方、『経済学教科書』は、叙述の順序からみると、原始的蓄積過程を「封建的生産方法」から「資本主義の生産方法」への推転を媒介するたんなる歴史的過程として論じている[3]。わが国においても、むろんさまざまの角度から意見がのべられている[4]。これらの諸見解をつうじて、そのなかから出てくる問題を整理してみると、のちにも詳しくのべるように、ひとつは、いわゆる「論理的・歴史的方法」にしたがつて原始的蓄積論を第一篇「商品と貨幣」と第二篇「貨幣の資本への転化」との中間項として配置する考え方が、なぜに『資本論』ではとられていないのかという問題であり、いまひとつは、原始的蓄積論が第一巻末尾におかれるべきものとして、それならば、この議論は第一巻の総括的終章たる役割を果しているのか、あるいはまた第七篇「資本の蓄積論」への歴史的補章たる位置をえているのか、という問題である。『資本論』生成史という大きな領域のなかで、これらの問題に検討を加えるのが、本稿の目的とするところである。同時に、いわゆる「論理的・歴史的方法」という方法論上の問題についても考えてみたい。

(1) 『資本論』中にあらわれる歴史的分析といつても、どこからどこまでというふうに区別してとりだすことは、厳密には困難であるし、また方法的にも問題があろう。のちに詳しくこの問題にふれるが、しかしここでは、さしあたり、論理的な叙述にたいして一見して明らかに歴史的な叙述として扱いうるものを、問題としたい。たとえば、第一巻二四章の『原始的蓄積過程』、同二五章『近代的植民論』、第三巻二〇章『商人資本にかんする歴史』、同三六章『資本主義以前』、同四七章『資本家的地代の源泉』など。もちろん、具体的な歴史叙述ということになると、マルクスの見解じたいは、むしろ、その三部作といわれる『フランスにおける階級斗争』(一八五〇年)、『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』(一八五二年)、『フランスにおける内乱』(一八七一年)などにあらわれているわけである。しかし、そこには、広い意味での唯物史観の適用はあつても、封建社会から資本家的社会への転換にかんする論理的な規定というような社会制度の過渡期の歴史理論が明確にうちだされているわけではない。このような、い

わば、歴史叙述の基礎となり、歴史分析の究明基準ともなるような歴史理論を、マルクスにおいていうとすれば、やはりそれは、『資本論』のあちこちに展開されている歴史的説明をあげるほかはない。

(2) ローゼンベルグ『資本論註解』、第七書房版訳、第一巻第二分冊、五四九ページ。

(3) 『経済学教科書』、マルクス・レーニン主義普及協会訳、第一分冊、八五―一〇九ページ。

(4) この問題をとりあつかつている主要な著作としては、堀江英一『経済学から歴史学へ』、大塚久雄『欧洲経済史』、飯田貫一『資本制生産に先行する諸形態』の解説、梯明秀『資本論の弁証法的根拠』などがある。もちろん、これらは、それぞれ論点を異にしている。しかし、なんらかの関連で、本文の問題にかかわつているとみてよいとおもう。

二

原始的蓄積過程についての議論が、マルクス諸著作のうちで最初にあらわれてくるのは、『経済学批判綱要』(一八五七―一八五八年)である。しかし、「序説」および「貨幣にかんする章」、さらには「資本の生産過程」にかんする叙述部分などの、『綱要』の最初の論述部分にあらわれる、当初のいくつかの経済学体系プランには、それはまだ姿をあらわしていない。それどころか、そこでは、近代的資本形成の具体的歴史は、「土地所有の歴史」[1]にほかならないのであるから、したがつて、「すでに形成された、自分自身の基礎のうえで自己運動する、ブルジョア社会」だけを対象とする「資本一般」論としては、これを問題としない、とマルクスは、論じているのである。といつても、むろん、資本概念の理論的形成の側面から必要なかぎりにおいては、いくつかの単純な経済的範疇が、たとい近代以前の諸歴史的社会に発展するものであつても、流通上の諸契機としてとりあげられなければならないが、これに反して、近代的資本形成史それじたいは、あくまでも「資本一般」論が包括する所要の領域にはぞくさない、とみているのである。[2]

(1) 「封建的な地主の地代生活者への、世襲的な半隷属の・また往々にして不自由な・終身小作人の近代的農業家への、また土地に緊縛された隷農や賦役農民の農業日雇労働者への、漸次的な転化がしめすところの土地所有の歴史は、事実上、近代的資本の形成

の歴史であろう。」(Grundrisse, S. 164)

(2) この点については、拙稿『「経済学批判綱要」における生産一般についての考察』を参照されたい。

しかるにマルクスは、「資本の生産過程」の分析をすすめてゆくうちに、右の趣旨に反して、原始的蓄積論をば、資本概念形成の一契機としてとりいれているのである。

(A) 「資本概念の形成において in der Formung des Begriffs des Kapitals 展開されるべき第三の契機は、労働に対立するところの原始的蓄積であり、したがつてさらには蓄積に対立するところの対象性をもたない労働である。第一の契機は、流通から生じかつ流通を前提とするものとしての価値から出発する。それは、資本の単純な概念であつた。すなわち貨幣であつた。そしてこの貨幣は直接に、資本へとさらに規定されたのである。第二の契機は、生産の前提およびその成果としての資本から出発する。第三の契機は、流通と生産との規定的統一としての資本を措定する。(生産過程の結果としての、資本と労働との関係、資本家と労働者それじたいとの関係。)……しかしながら、資本が生成するためには、それは一定の蓄積を前提とする。……資本の生成のために必要なこの蓄積、したがつてすでに前提として一契機として資本の概念のなかに吸収されているところのこの蓄積は、資本として生成されてしまつている資本――そこではすでに諸資本が存在しなければならないのだが――の蓄積とは、本質的に区別されるべきである。」(Grundrisse, S. 225–226)

ここでは明らかに、原始的蓄積過程の分析が、資本概念形成の一契機としてとり扱われており、しかも第三の契機としてそのうちに包摂されている。そしてこの契機は、第一の契機たる流通と第二の契機たる生産との規定的統一としての資本を、措定するものとなつている。ここでのマルクスの趣意を『綱要』にそくしつつ、いますこしたちいつて考えてみたい。

マルクスは、右の引用句にさきだつ「資本としての貨幣の章」と題記している準備ノートの敍述部分で、「流通一般」から「生産」への移行の論理にふれながら、つぎのようにのべている。

「資本は、さしあたり流通から、しかもその出発点としての貨幣から発生する。すでにみたように、流通にはいりこみ同時に流通から自己に復帰する貨幣は、貨幣がそこで自己を止揚するところの最後の要請である。それは同時に、資本の最初の概念であり、資本の最初の現象形態である。」(Grundrisse, S. 164)

「商品または貨幣からの過程の反復は、交換そのものの諸条件のうちには定立されていない。行為は、ただそれがなしおえられるまで、つまり交換価値の額だけ交換されるまでくりかえされうるにすぎない。それは、それ自体においてあたらしく点火されえない。だから、流通はそれ自体のうちに自己更新の原理をもっていない。流通の諸契機は、流通に前提されているのであって、流通それじたいによって定立されているのではない。」(Grundrisse, S. 166)

「はじめに社会的生産の行為が、交換価値の定立として、また後者がそのより以上の発展において流通として、――諸交換価値相互の充分に展開された運動として――あらわれたとすれば、いまや流通それ自体が、交換価値を定立したり生産したりする活動へと復帰する。流通は、自己の根拠としてのそれへと復帰する。……こうして、われわれは、ふたたび出発点に、交換価値を定立しつくりだす生産に、到達している。だが、今度は、この生産は、流通を発達した契機として前提していて、流通を定立しそして流通をあたらしく定立するためにたえず流通から自己へと復帰するような、不断の過程としてあらわれるのである。」(Grundrisse, S. 167)

このように、マルクスは、「流通」の全体にたいする否定の根拠として、「流通はそれ自体のうちに自己更新の原理をもっていない」という点にもとめ、そこに「流通」の「生産」への移行の内的必然性を設定しているのである。このばあい、「生産」といわれているものは、「流通」をとおして成立してきた資本が、「自己の根拠」として復帰すべ

き「生産」であるから、マルクスが『綱要』の展開のうちでしばしば言及している「生産一般」とは、いちおう区別すべきものとみなければならない。ここでいう「生産」とは、いわば資本の形式に包摂されたところの、資本の生産過程にほかならぬ。それは、「流通」によって媒介されたところの過程であり、「生産一般」のように直接的に無媒介的に設定されたものではない。これらの引用文で論じられている諸点を、さきにあげた(A)の引用文とてらしあわせてみると、こうなる。「資本概念の形成」上から第一の契機としてあげられているものは、「資本の最初の現象形態」＝「資本の単純なる概念」であって、それは、要するに流通上から必然的に生じてくるところの「価値」および「貨幣」を基礎とする。第二の契機としてあげられているものは、資本の「生産過程」をいみするが、しかしこの「生産過程」たるや、たんなる直接性としての「生産一般」ではなくして、「流通を定立しそして流通をあたらしく定立するためにたえず流通から自己へ復帰するような不断の過程」としての「生産」であり、「生産の前提およびその結果としての資本」からして生成してきたものである。これらにたいし「第三の契機」は、「原始的な蓄積」であって、「流通と生産との規定的統一としての資本」をつくりだすものであり、「資本と労働との関係」、したがって、「資本家と労働者との関係そのものを」を、「生産過程の結果」として、つくりだすところのものである。これは、いいかえれば、「流通」を、あるいは「交換価値」・「貨幣」を、「生産過程」を媒介として、あるいは「使用価値」を媒介として、「再生産」するような過程として存在する資本、すなわち「産業資本」をば、つくりだすところの契機である。一言でいえば、この契機は、いわゆる資本関係を再生産するような資本を、「資本概念の形成」において、措定してゆくものである。したがって、「資本の形成」上に必要なこの第三の契機は、「資本概念」の「前提」(傍点筆者)として、そのなかに包みこまれているわけである。

ところで、右の(A)の引用文につづいて、つぎのような断想が記されている。

(B) 「これまですでにみたとおり、資本は、つぎのものを前提とする。(1) 生産過程一般、これは、すべての社会形態にとつて固有のものであり、したがつて歴史的な性格をもたず、もしそういつてよければ、人間的な過程である。(2) 流通、これは、それじたいすでにその契機の各々においても、またさらにその総体性においても、特定の歴史的な産物である。(3) 両者の規定的統一としての資本、ところでこの一般的生産過程そのものが、資本のたんなる要素としてあらわれるにすぎなくなるや、それが、どれだけ歴史的に修正されるかということは、資本の展開上であきらかにされなければならない。これは、資本の特殊的な諸区別の単純な把握から、資本の歴史的諸前提一般があきらかにされなければならないのと同様である。」(Grundrisse, S. 226)

この章句で、資本の前提条件としてあげられているものは、「生産一般」と「流通」と「両者の規定的統一としての資本」であり、順序はやや異なるけれども、[1] 大体において(A)の引用句にある三つの契機に対応しているものと、みることができる。「第三の契機」とされたものは、ここでは、同じく「両者の規定的統一としての資本」という表現をとつている。ただ、「資本」が、「両者の規定的統一としての資本」を「前提」するといつており、(A)の章句でみられたように「第三の契機」がこれを「措定する setzen」とはいつていない点が、ちがつている。ここには、考慮すべき多くの問題があるようにおもわれる。しかし、要するに、マルクスが、主張したかつたことは、「資本」はさしあたり、「単純な概念」として「流通」にあらわれるが、ついでは、非歴史的な「生産」一般と歴史的な「流通」との「直接的な統一」[2]として形成される。だがこの「直接的な統一」としての資本を、「措定」してゆくものこそ、「第三の契機」としての「原始的蓄積」なのだ、ということである。

(1) (A)の引用文は、「貨幣の資本への転化」(現行資本論、第一巻、第二篇、第四章)に相当する「資本としての貨幣の章」以後の展開を頭において、マルクスが記したものであろう。したがつて、そこでは、「流通」が「生産」を包摂していくようなかたちをと

つている。これに反して、Ⓑの引用文は、おそらく、『綱要』の冒頭いらいしばしば言及されている「生産一般」に着目しつつ、それまでの敍述全体をふりかえつて、記されたものとおもう。だから、「生産一般」が第一の前提条件とされている。しかしながら、Ⓑの引用章句の末尾に論じられているように、「非歴史的および歴史的諸前提」が、「資本の展開」それじたいにおいてたんなる「資本の要素」としてあらわれてくるという見方は、のちに徹底したかたちをとることとなり、「流通」から出発する立場を確立する素地となるのである。前掲拙稿参照。

(2)

「資本は、生産物と貨幣との、あるいはより適切には生産と流通との、直接的統一である。」(Grundrisse, S. 238)

三

『綱要』の「資本にかんする章」は、編輯者がなしているように内容的にみて「資本の生産過程」、「資本の流通過程」および「果実をもたらすものとしての資本」、の三つに大別される。マルクスは、この「資本の流通過程」の論述にはいつてからまもなく、ふたたび資本の原始的蓄積の問題にふれ、かなりの程度において具体的な内容をのべている。そこで、われわれは、しばらくのあいだ、おそらく原始的蓄積論にかんするマルクスの最初の準備ノート(S. 363-S. 374)とおもわれる、この敍述部分を、整理検討してみることにしよう。まず最初に、便宜上これを六つの部分にわけて、その要旨を摘記することとしたい。

[1]　ひとたび資本家的生産様式が確立されるやいなや、資本の運動は、「その内的な本質にしたがつて」、自分自身の存立の諸条件をつくりだしてゆく。しかし、「資本形成」の「本源的前提」あるいは「歴史的条件」としては、資本にとつては「所与の」・「外的な」諸条件が、貨幣の「蓄積」eine akkumulation, hoarding および「労働能力」das Arbeitsvermögen の集積という基本的な二つの形態において、あらわれてくる。けれども、かような具体的な「資本形成」の過程で必要とされたところの歴史的な諸条件なり諸前提なりは、資本の成立と同時に、「現実的な資本」ある

いは「既成の資本」のうちに、「消滅し」かつ「止揚」されるのである。すべての「生成 Werden」・「成立 Entstehen」の契機は、資本の「定在 Dasein」のうちの諸契機に、止揚され吸収される。(註)

註　ここでは、比喩的な説明がしばしば使用されている。たとえば、農奴の都市への逃亡は、都市制度成立の歴史的前提ではあるが、都市制度の契機ではない、という歴史的事例、また、火の海、蒸気の海は、大地の前提ではあるが、完成せる大地にとつてはそれの彼岸にある、というような自然科学上の比喩、など。さらに、重要なことは、資本の「生成」の条件とその「存在」の条件とを混同して、資本の永遠性や調和論を帰結する、ブルジョア的経済学者の批判が、ここでなされていることである。(Grundrisse, S. 363) この点はのちにまたふれる。

[2]　しかし他方では、このような完成された資本概念の諸契機は、「歴史的な観察がはいりこまねばならない諸点」や、「生産過程のたんに歴史的な姿態にすぎないものとしての、ブルジョア経済が自分をこえて未来の歴史的な生産方法をさししめす諸点」を、しめすのであつて、これが「ブルジョア経済の諸法則」を解明する「われわれの方法 unsre Methode」である。だから、この諸法則を明らかならしめるについては、「生産諸関係の現実的な歴史」をかくにはおよばない。歴史的に完成した資本の諸関係の、正しい「観察と演繹 Anschauung und Deduktion」とによつて、われわれは、「この組織の背後にひそむ過去性を指示する」ところの「第一の方程式」を把握することができるし、また「過去の理解のための鍵」(註)をみいだすことができるのであるが、同時にまた、将来社会の諸形態の示唆をうることもできる。けだし、「一方では、ブルジョア社会以前的な局面は、もつぱら歴史的な諸前提として、すなわち止揚された諸前提として、あらわれるが、他方では、生産の現在の諸条件は、自分自身を止揚しつつある・あたらしい一社会のための歴史的諸条件をつくりつつある・ものとして、あらわれる」からである。

註　マルクスは、ここで、「なおふたたびおそらくはとりあげることになるだろう、ひとつの仕事」(Grundrisse, S. 365) と註している。

[3]　つぎに、「価値の資本への完成態 das Gewordensein des Werts zu Kapital」における、「労働能力」をとりあげてみよう。労働者の「生ける労働」は、「対象化された・死せる・労働」を増殖するたんなる「手段」と化し、その結果として、「つくりだされた富」は、かれにとってまったく「疎遠な fremd」ものとなる。「原料」・「器具」・「生活資料」などの生産過程上の物的な諸条件は、すべて「外的な・独立せる・存在」となり、労働者じしんは、それらのものから隔絶されて、「向自的に存在する諸価値 für sich seiende Werte」を、つまり資本家の富を、つくりだすだけである。こうして、生ける労働の「客観的な諸条件」は、主観的な定在としての生ける労働能力にたいして「分離された独立化された getrennte, verselbständige」諸価値としてあらわれる事態となり、したがってまた、生ける労働能力じたいも、労働者にとっては、「ある別種の価値」として（ふつうのいみの価値ではなく、かれらの使用価値とも異なる使用価値として）、あらわれざるをえない。すなわち、生ける労働じしんが、「労働能力」からみて、外的な・隔絶された・ものとなる。しかし、かような労働条件の労働主体からの「分離」の認識や、自己労働にもとずく生産物の自己所有という見方は、資本にもとずく生産様式じたいの産物にほかならず、やがてそれはこの生産制度じたいの弔の鐘をならすのである。

[4]　これに反して、貨幣が資本の自己増殖過程にはいりこむ以前の「本源的関係」を考えてみると、この本源的関係を構成するさまざまの条件が、まず問題となる。「貨幣を資本に転化し、労働をば、資本を措定する・資本を創造する・労働、つまり賃労働たらしめる」ための、「本質的諸条件」は、つぎの四つのものからなりたつ。(1)　一方において生ける労働能力が、労働の現実化のための「客観的諸条件」からまったく分離されるのみならず、その「生存手段」・「生活資料」からもきりはなされて、「まったくの主観的存在」となり、「完全な抽象性」の現存在となること。(2)　他方では、「現存の価値あるいは対象化された労働」が、たんに価値生産に十分なだけでなく、生ける労働能力

の再生産にも十分なほどの量において、蓄積されるということ。(3)「労働能力」と「蓄積」との両極のあいだに、「自由な交換関係＝貨幣流通」が存在し、したがつて生産が、交換によつて媒介されたものとなること。(4)「労働の対象的諸条件」の極では、直接的な使用価値ではなくして、あくまでも価値めあての、価値の自己増殖を究極の目的とするところの生産が、おこなわれるということ。

[5] かようにして成立する賃労働の関係は、生産者をば「労働機械」として他人の所有たらしめることを基礎とする奴隷制的関係とも、また、生産者が労働家畜と同様に「土地の附属物」と化している農奴制的関係ともちがつて、「形式的に交換者どうしが平等で自由な関係」をもとに、構成されている社会関係である。労働能力じたいは、ここでは自由な労働者にとつて、かれが自由に支配・処理できるところの、唯一の所有物としてあらわれる。ただ、同じく生ける労働の所有者と貨幣の所有者とが、平等で自由な契約関係のうえに、一定の交換関係にはいるといつても、それだけのことであるならば、それは「資本も賃労働も」つくらない。その貨幣が「資本としての貨幣」ではなく、「収入としての貨幣」にすぎず、したがつて生ける労働とひきかえに交換される「たんなる流通手段」にすぎぬばあいには、生ける労働は、「経済学的ないみでの賃労働」にはならずに、たんなる生ける「サービス Dienste」となる。そして、このような「収入としての貨幣」と生ける「サービス」との交換は、「単純なる流通」にぞくする。これに反して、資本と賃労働とをつくる交換関係は、外見上は「対象化された労働と生ける労働との交換」のかたちをとつているけれども、これとは本質的に異なる。すなわち、前者は、「客観的」な形態における・「価値としての」・「自分を保持する価値としての」・規定性をもつのにたいして、後者は、「一定の・特殊的な・使用や消費のための使用価値ではなくて、価値のための使用価値」としての性質をもつているからである。

[6] さいごに「取得法則の転換(註)」。「取得過程」としての「価値増殖過程」では、「剰余労働」は「剰余価値」をつ

くりだすが、この「生産物」を労働者は所有できない、それはかれにとつて「外在化された所有 fremdes Eigentum」としてあらわれ、逆に、「外在化された労働」は、資本の所有としてあらわれる。これは、ブルジョア的所有の第二の取得法則である。「第一の取得法則は、労働と所有との同一性である。第二のそれは、否定された所有としての労働であり、いいかえれば、外在化された労働の外在性の否定としての所有である。」

註　「取得法則の転換」は、『綱要』執筆当時のマルクスの考えのなかで、相当に大きな比重をもつている。その端的なあらわれは、ウルテクスト中の、「(5)単純流通における取得法則の現象」(S. 901-918) である。これについては、別稿で独立にあつかうつもりである。

右の摘記から、まず第一に注目される点は、「現実的な資本」あるいは「既成の資本」においては、すべての歴史的な「資本生成」・「資本成立」の諸契機や諸条件が、止揚されていると、明記されていることである。すなわち、資本の「定在」は、資本のすべての歴史的形成諸条件を、内包しているということである。したがつて、そのかぎりでは資本形成の歴史的諸条件は、資本の「定在」のうちにおいては、まつたく「消滅」していて、理論的ないみでの資本概念の構成上の諸契機をなさないのである。ひとたび資本が完全なかたちで確立されたあとは、資本みずからが自己の存立の諸条件を再生産し、拡大再生産してゆくけれども、歴史的な資本形成史上の諸条件は、資本の確立をつうじて、止揚され、それのうちに消滅してゆく。さきにマルクスが、近代的資本形成の具体的過程を、「資本一般」論のふくむ領域以外にぞくするとみなしたのも、このいみであろう。

しかるに他方、マルクスは、完成された資本概念の諸契機は、おのずから歴史的な「資本生成」や「資本形成」の過程を「さししめす」諸点をふくむのであり、さらには「あたらしい社会」の歴史的諸条件を「指示する」諸契機をふくむ、とのべている。これは第二に注目される点である。すなわち、そこでは、過去の歴史的過程を理解する鍵が

あたえられていると同時に、未来社会の諸形態の示唆があたえられている、ということである。これは、一見したところ、第一の点と矛盾するようであるが、けっしてそういうものではないであろう。「資本一般」を主たる対象とする領域では、単純なるものから複雑なものへと上向する過程、もしくは抽象的・一般的なものから具体的・特殊的なものへと展開してゆく過程のみが、とりあげられるべきであり、それゆえに、もつぱら理論的な諸契機のみが論じられるわけであるが、しかしこのことは、それが「資本一般」の生成・消滅する具体的・歴史的諸条件を示唆するという点を、排除するものではない。いなむしろ、それらの歴史的諸条件を理解し解明する鍵を提供する、というのである。

だが、これは、さきにマルクスが、原始的蓄積過程を、資本の第三の契機にとりいれた観点と、矛盾しないだろうか。さきにあげた(A)および(B)の引用文においては、資本概念を形成する諸契機に、生産と流通と原始的蓄積との三つがかぞえられていた。これら三契機のうち、前の二者は明らかにそれぞれ「資本一般」論の非歴史的ならびに歴史的前提でありながら、その展開じたいの過程中で、資本のたんなる諸契機としてふたたび措定されてゆくというあつかいをうけている。[1] しかし第三の契機たる原始的蓄積過程も、そういうものとしてあつかうことが、はたして可能であろうか。右の摘記では、この契機は、ふたたび資本のたんなる諸契機として措定されてゆくようなものとは区別された歴史的な諸条件として把握されており、しかも「資本一般」論が包括する分野には所属しないものとして排除されている。われわれは、こうした経緯のうちに、「資本一般」の論理構造においては、原始的蓄積論のような具体的・歴史的諸過程はしだいにとりのぞかれてゆく跡を、よみとることができるのである。

以上は、主として右の要約的敍述の[1]と[2]とについて、特に注目される諸点をめぐつて論じてきたが、[3]以下は、つぎの論述との関連でふれることにしたい。

(1) 「資本」が前提とする・「資本概念を形成する」・諸契機のうち、「生産」については、拙稿「生産一般にかんする考察」(北大経済

学研究十六号所収）を参照されたい。「流通」一般については別稿を用意している。

四

『綱要』では、さきにあげた原始的蓄積にかんする叙述につづいて、有名な「資本制生産に先行する諸形態」(註)が論じられている。マルクスは、そういう題名をつけているが、内容的にみるならば、この叙述部分(S. 375-S. 413)は、大ざつぱに二つの部分にわけることができるだろう。その前半(S. 375-S. 396)は、土地所有の歴史的諸形態をとりあつかつており、その後半(S. 396-S. 413)は、主として原始的蓄積過程の分析にあてられている。そこで、ここでは、この後半の部分においてマルクスが原始的蓄積というテーマをどのように論じているか、という点だけを、問題とすることにしたいとおもう。

註　「資本制生産に先行する諸形態」(資本関係の形成あるいは原始的蓄積に先行する過程にかんする)という表題は、この歴史的叙述部分の全内容をあらわすには不十分であるし、また誤解をまねくおそれがある。一読して明らかなように、これは、土地所有形態と原始的蓄積とを主内容とする部分であつて、ただたんに「資本制生産に先行する諸形態」だけをあつかつているものではない。

便宜上ここでもこの叙述部分を、いくつかの項目にわけて要旨をのべることとしたい。

(1)　いうまでもなく、労働が資本に対立する関係、すなわち資本関係は、一定の歴史的な関係を前提としているが、その前提は、「労働者がそこにおいては、所有者でもあるところの、あるいはそこにおいては所有者が労働するところの・種々異なつた・諸形態を分解する過程」である。この分解は、四つの側面であらわれる。(A)「労働者が生産の自然的条件としての土地にたいする関係の分解。」(B)「労働者がそこにおいては要具の所有者としてあらわれるところの諸関係の分解。」(C)だが、労働者は、「生産者としての存在をつづけるために」必要な「消費諸資料」は、これを占有していること。(D)労働者たちじしんが「客観的生産諸条件」にまだ直接に所属しており、またそのようなものとして

占取されているところ、「奴隷あるいは農奴」の関係が、分解されていること。

これは、自由な労働者が歴史的に成立するための諸前提であるが、他面、この労働者にとつて他人の財産として独立している「資本」が生じてくるための歴史的条件は、つぎの諸点に要約される。(A)労働者が、「土地にたいする非所有」の立場にたつて、資本としての客観的諸条件に関係するということ。(B)生産者が、「自分自身のものとしての要具にたいする関係」を、否定されているということ。このばあい、生産者が「要具の所有者」として労働する関係というのは、いわば「労働の手工業的な、または都市的な発展」にもとずくツンフト的な関係であつて、土地を所有している直接生産者たちによつて自然的に形成される農業的形態とならんで、しかもそれとは別個にあらわれることが多い。(C)生産者が、「土地にたいしても、要具にたいしても、はたまた労働そのものにたいしても、自分のものとしては関係しない」が、ただ「生産諸手段にたいしてのみ所有者として関係する」形態は、ほんらい奴隷制・農奴制にあらわれる。この形態が、歴史的に否定されるということ。

(2) こうした歴史的諸前提は、具体的にみるならば直接的生産者を土地所有から分離する過程であり、農奴的隷従の諸関係の分解であると同時に、労働要具の所有を基礎とするツンフト的諸関係の分解である。これを一言でつくせば「生産諸関係」の分解過程にほかならない。しかしこの分解過程は、「一面からみれば自由な労働者、他面からみれば資本」という、「対極的な諸条件の分立化」の過程である。すなわち、自由な労働者としての諸個人の大衆を客観的労働諸条件にたいして、否定的に対立させるおなじ過程が、これらの諸条件をば、「資本」・「自由な資財」として、自由な労働者に対置させるのである。原始的蓄積にかんする経済学者たちの諸結論にたいする批判。

(3) 貨幣が、「貨幣財産」として蓄積されるための歴史的形態は、「高利貸資本」と「商人資本」である。したがつて、「資本の形成は、土地所有から出発するのではなく」、「それは、商人的な・または高利貸的な・富から出発するの

である。」しかし、この貨幣財産が、「ほんらいの意味における資本――産業資本」に転化されるためには、自由な労働者がこれに対立するものとして創造されていなければならない。この歴史的過程は、資本の成果ではなく、前提である。これにより、「資本家は、仲介人として（歴史的に）、土地所有あるいは所有一般と労働とのあいだにわりこむのである。」

(4)　従来のふるい生産様式の分解。貨幣財産は、分解の一要因であり、また分解は、貨幣財産の資本への転化の条件である。しかし、「産業資本」＝「ほんらいのいみの資本」の成立には、貨幣財産の存在だけでは不十分である。また「自由労働」の存在だけでもたりない。「資本の本源的形成 Die Urbildung des Kapitals」は、生活諸手段や労働諸要具や諸原料、つまり労働の客観的諸条件を、資本が蓄積する、というようにしておこなわれるものではけっしてない。資本が労働の客観的諸条件を創造する、というようにして、事態がすすむのではない。貨幣財産の存在は、基本的にあたえられている歴史的な分解過程にたいする促進の役割をはたす。すなわち、生活諸手段や労働要具の交換価値への転化を促しつつ、それら商品市場の形成に寄与し、さらには無産大衆の賃銀労働者化をおしすすめながら、労働市場をつくりだす。具体的にいえば、高利貸資本・商業資本・都市生活・国庫といった形態をつうじて、それは、旧来社会の崩壊を促進させる。問屋制支配体制・外国貿易にむすびついたマニュファクチュア・農村副業とむすびついたマニュファクチュアなどの役割。

(5)　ひとたび資本が成立したばあい、それが旧来の諸関係におよぼす分解作用。資本による国内市場の形成。資本概念についてのブルジョア的経済学批判。資本は、「生産関係」であることの強調。

この「先行諸形態」の後半にのべられている議論は、さきにみた「原始的蓄積」にかんする敍述部分（その[3]から[5]までをもふくめて）に比し、いちぢるしく、具体的・歴史的な諸条件の分析をふくんでいることが、まず第一に注目

される。さきの箇所では、労働の自己疎外の問題（3）、賃労働成立の根本的諸条件（4）、自由と平等にもとずく交換関係（5）などが、いわば抽象的・観念的に論じられているけれども、ここでは、資本成立の根本条件である貨幣財産の蓄積と労働力の抽象化（あるいは商品化）が、いつそう具体的・歴史的にとらえられ、いちだんとつまびらかに究明されている。しかし、まだ現行『資本論』にみられるような原始的蓄積過程にかんする議論の内容には、遠くおよばない。

五

このような原始的蓄積過程にかんする敍述は、しかし、『綱要』での論述の順序からみるならば、「剰余資本」の蓄積の過程を抽象的に論じたさいに、この「剰余資本Ⅰ」を生ぜしめる前提として問題とされ、そこからさかのぼつて歴史的考察を加えるというかたちを、とつているのである。そしてこの歴史的敍述のあとには、ふたたび流通過程の説明部分がつづいていて、準備ノートの巻末までこの問題に詳しくふれている箇所は、みあたらない。マルクスは原始的蓄積という資本形成の歴史的契機を、「資本論プラン」のなかでは、どのように扱つているか、ということを、つぎに、若干の資料から検討してみよう。

(a) 一八五八年二月二二日付のマルクスのラッサール宛の手紙では、つぎのようにかかれている、[I]六部作＝経済学批判 [II]経済学と社会主義との批判と歴史 [III]経済的諸範疇と諸関係の発展のかんたんな歴史的概観。これはマルクス初期の著作構想としてしられているものである。これによると、原始的蓄積論は、経済史の一項目として第三の著作に編入されるのではないか、という想定が、可能である。

(b) だが、一八五八年六月前半執筆と想定される「第一章草案」では、それは、つぎのような位置におかれている。

㈠　価　　値

㈡　貨　　幣

㈢　資本一般

(1)　資本の流通過程

(a)　資本と労働能力との交換

(b)　絶対的剰余価値

(c)　相対的剰余価値

(d)　本源的蓄積（資本と賃労働との関係の諸前提）

(e)　取得法則の変転

(2)　資本の流通過程（以下省略）

(c)　さらにまた一八五九年の三月―四月のプラン草案でも、これに似た立場におかれている。

資本の生産過程

(1)　貨幣の資本への転化

(2)　絶対的剰余価値

(3)　相対的剰余価値

(4)　本源的蓄積

(5)　賃労働と資本（以下省略）

(d)　『剰余価値学説史』を構成するノート一八の末尾、リチャード・ジョーンズを論じた箇所に見出されるプランに

よれば、左記のようになつている。

第一巻〔資本の生産過程〕

(1) 序論。商品、貨幣

(2) 資本の貨幣への転化

(3) 絶対的剰余価値（細項目省略以下同様）

(4) 相対的剰余価値

(5) 絶対的および相対的剰余価値の結合

(6) 資本への剰余価値の転化、本源的蓄積、ウェイクフィールドの植民論

(7) 生産過程の結果

(8) 剰余価値にかんする諸学説

(9) 生産的労働にかんする諸学説

ところで、内容的にみると、「賃労働」、「自由な労働」、「労働能力」および「商人資本」、「商業」などの、原始的蓄積過程にとつての基本的条件にかんしての叙述は、『綱要』の全ノートにわたつて少なくない。つぎに、それをいくつかあげてみよう。

[1] 「外部的商業の、いわゆる文明化的作用。交換価値を措定する運動が、どの程度に生産の全体を把握するかということは、一部分は外部からのこの作用の強さと、一部分は内部的発展の程度とに依存する。」(Grundrisse, S. 921-922)

たとえば、一六世紀のイギリスでは、オランダの毛織物工業の発展により、羊毛生産が促進され、その結果農耕地の牧羊地への転化がおこなわれたが、この経済的変革は、一方では旧来の生産諸関係を分解して、交換価値を規定的目

的とする生産をつくりだした。「これは、資本への・生産を支配する形態としての交換価値への・単純な流通の歴史的復帰 Rückgang のひとつの実例である。」(ebenda, S. 922)

[2] 「たんなる労働と労働とが交換される一状態は、その労働が直接的に生きた形態であろうと生産物の形態であろうと、労働が客観的諸条件と本源的にむすびついている状態から労働が分解することを、前提にする。そのために、一方では労働がたんなる労働としてあらわれ、他方では労働の生産物が労働にたいして価値としてのまったく自立的な存在をうけとる。労働と労働との交換——外見上は労働者の所有の条件である——は、労働者の基礎としての労働者の所有喪失状態にもとづく。」(ebenda, S. 414)

[3] 「自由なる労働」としての「個人の、労働の生産諸条件からの分離は、多数の個人がひとつの資本のもとに集団化することにひとしい。」「資本による蓄積のまえには、資本を構成する・その概念規定にぞくする・ひとつの蓄積がある。われわれは、これをまだ集積とよぶことはできない。集積は、多数の資本との区別においてあらわれるからである。もしもひとがまだ資本そのものについていうならば、この集積はなお蓄積あるいは資本の概念と一致する。すなわち、それは、なんら特殊な規定を形成しない。けれども資本は、はじめから多数者としての労働にたいして、一つのものとして、ないしは単一者として、対立する。それゆえに資本は、労働者の集積として、労働に対立して、かれらの外部に存する単一者として、あらわれる。この方面からみれば、集積は、資本概念のうちにふくまれている、多数の生ける労働をひとつの目的のために集中すること、本源的には生産様式そのものにおいてもなんらおこなわれず、この生産様式を滲透させるのに役立つところの、ひとつの集積。労働能力にたいする資本の集中化の作用、あるいは自立的にこの多数の労働能力の外部に存在するそれらの単一者としての資本の措定。」(ebenda, S. 484)

六

これらの若干の資料から、われわれは、マルクスが『綱要』をひととおり記したのちにおいて、原始的蓄積論を、「資本論」体系のなかのいかなる位置に配しようとしたかという点を、うかがいしることができるのではないかとおもう。(B)、(C)、(D)の引用章句によれば、原始的蓄積論は、だいたいにおいて、商品、貨幣、貨幣の資本への転化、絶対的ならびに相対的剰余価値の生産のあとをうけて、「資本の生産過程」を論ずる第一巻の末尾に近く配置されている。このことは、これまでのわれわれの議論のうえでどういういみをもつだろうか。

(1) さきにもみたとおり、当初において資本概念形成の第三の契機とされた原始的蓄積論は、ノートの論述がすすむにつれて、「資本一般」にかんする領域外に排除され、それはたんに「資本一般」論の展開上の諸点で示唆されるものにすぎない地位に、おかれたが、これは、他方において「資本」の前提とされた「生産一般」が「資本一般」の冒頭の章からとりのぞかれたのと対応する。そして、他方では、「流通一般」のみが、「資本一般」論の「序章」としてまったくあらたな視角から設定されたことに、かんれんしている。こうした趣意は、原始的蓄積論が、「資本一般」の理論体系の重要な一環としての位置を変えることにより、つらぬかれているとみることができるのではなかろうか。けだし、ここでは、「生産一般」が「剰余価値の生産」としての「資本の生産過程」に編入されるのと対応的に、「資本論」の第一巻の終章ちかくにおかれるかたちが、とられていて、明らかに論理体系そのものにたいする補足的・歴史的・項目としての意義をあたえられているにすぎないからである。いいかえれば、当初において「生産」や「流通」と、「資本」の論理とのあいだの、媒介的役割をなしていた第三の契機としての原始的蓄積論は、「資本」じたいの論理的な方向への純化の傾向によって、たんなる補足的敍述になったからである。このいみにおいては、それは、「資本

一般」というような資本主義の理論構造やその原理のみを問題とする理論領域にぞくするものではなくて、むしろ資本主義成立史をもふくむところの資本主義発展論＝段階論の範囲においてとりあつかわれるべきものであろう。(1)

さきにみた、ブルジョア社会の経済的運動法則を明らかならしめるためには、「生産諸関係の現実的な歴史」をかく必要がないという立場にたつかぎり、原始的蓄積論は、「資本一般」の理論的展開上においてしめるべき位置をもたないはずである。したがつて、たとい補足的終章としてではあるにもせよ、それが理論的展開を第一義とすべき「資本一般」のなかのひとつの章をなしていることは、不首尾というほかはなく、理論的方法の不徹底をしめすものとみなければならない。

(2)　ところが、他面、原始的蓄積論は、この段階においてすでに、古典経済学の方法意識にたいする批判の産物である。古典経済学者たちがのこした、経済学体系にかんする伝統的編別論は、おおまかにいつて生産・交換・分配・消費の諸項を形式的な並列関係としてふくんでいた。マルクスにおいては、『綱要』の「序説」にもみられるとおり、これらのあいだの有機的諸関連の統一的把握のもとに、商品価値から諸階級にいたるまでの理論的展開があたえられている。しかも、こうして完成した理論的体系じたいは、資本主義社会の歴史的な段階諸相を示唆し、なかんずく資本主義社会の始めと終りとを指示する性質のものである。(2) 原始的蓄積論は、これを理論体系の場で意義ずけ、位置ずけることによつては、積極的に古典経済学の方法的な非歴史性の批判の役目をなしているし、他面、これを、「生産一般」とともに「資本一般」から排除することによつては、逆に、理論体系そのものの歴史性を消極的にさししめすものとなつている。

(3)　だが、『綱要』執筆当時のマルクスの原始的蓄積論にたいする扱いは、むしろ「資本関係」あるいは「資本と労働との関係」の究明という「資本一般」論のほんらいの課題に照らしてみると、きわめて自然なかたちをとつている

とみることができる。「資本の生産過程」においては、剰余価値の理論が中心的テーマをなす。剰余価値は、資本と労働との関係を端的に示すところの範疇であり、したがって、剰余価値の生産は、資本対労働の関係の生産であり、資本家階級と労働者階級の関係の生産である。マルクスは、さきの(B)、(C)、(D)のプランで、剰余価値論のすぐあとに原始的蓄積論を位置ずけているが、これは、剰余価値としての経済学上の範疇がさししめすところの生産諸関係・階級諸関係を、かれが問題としていたことをあらわしている。「資本関係」や「資本と労働との関係」を明らかにするためには、この社会関係の特殊歴史性を解明するといういみで、原始的蓄積論や社会主義への過渡の問題にふれざるをえないからである。

以上で、『綱要』当時の資料をもとにした「経済学体系プラン」のうえでの「原始的蓄積」論の意義にたいする、いちおうの解釈をえた。ただこのさい、つけ加えておかねばならぬことのひとつとして、この当時のマルクスは、「原始的蓄積」論としてどういう内容のものを考えていたかという問題がある。さきにあげた、「原始的蓄積」にかんする最初の準備ノート(S. 363-374)や、「先行諸形態」の後半の部分にふくまれている「原始的蓄積」論についての第二の準備ノート(S. 396-413)、および『綱要』の随所においてこの主題に関説している敍述部分(本書一九ページから二〇ページにかけての(1)(2)(3)の諸章句)などでは、明らかに、現行『資本論』の同章のなかで強調されている要因のひとつが十分に意識的にとりあげられていない。それは、資本主義社会の成立史において大きな役割を演ずるところの「強力 Gewalt」という要因である。「原始的蓄積過程」は、なるほどそれじたいとしてみれば、生産手段と労働力との分離の過程であり、したがってまた、これらのものが社会の両極に蓄積される過程でもある。しかし、こうした過程をじつさいの社会史のなかで推進してゆくものは、国家権力を背景とするさまざまの「強力」にほかならない。それは、もちろん、いわゆる「等価交換の法則」が支配するところの領域には存在するものではなく、むしろ「経済外的」な

要因といわねばならないものであるが、しかし、社会体制の変革の時期には必ずあらわれてくるところの「強力」のひとつの形態である。すべての新しい社会をつくりだしてゆく「助産婦」の役割を果すものであり、それじたい「ひとつの経済力」といってよいものである。「原始的蓄積の秘密」は、この「暴力」というもののうちにひそんでいる。このいみで、「強力」は、「原始的蓄積」の本質的要素のひとつにかぞえてよいであろう。[3] しかるに、『綱要』は、資本家的生産成立の基本的諸条件の指摘を忘れてはいないが、それらの諸条件を現実の歴史のなかでつくりだしてゆく重要な要因たる「強力」についての言及や、それの歴史的・具体的事情についての関説を、ほとんどなしていないのである。つまり、資本主義社会の基本的関係である資本関係の「定在」の条件なり、契機なりの分析はあるにしても、この「定在」を歴史的に生ぜしめる「成立」・「生成」の条件なり契機なりの現実的に運動する態様の分析が、かけている。さきにのべたように、「原始的蓄積」論の本質的契機のひとつに「強力」的要因をかぞえなければならないとすれば、『綱要』でのその議論は、きわめて一面的であり、そのいみで抽象的議論の域を出ないものであろう。けれども、こういう抽象的な論述の範囲にとどまりながらも、この「原始的蓄積」論を、歴史的補足として、「資本一般」論の包括する理論的展開の埒外におしやったことは、この論述じたいのなかに含蓄される「経済外的要因」を示唆するものであり、逆にいえば、それが純経済的要因のみによって説明し去るべき性質のものでないことを明示していることになるであろう。

さらに、いまひとつこの稿のむすびとして、つけ加えておくべきものがある。それは、いわゆる「理論的・歴史的方法」についての問題である。これには、多くの考慮すべき問題がふくまれているので、ここでその全面的検討をおこなうわけにはいかない。しかし、上にのべたところからこの問題についていえることは、「資本一般」の「論理的」展開は、その非歴史的な前提＝「生産一般」や歴史的前提＝「流通」を、まったく排除してしまうのではなく、むしろ

これらをふたたびそれじたいの展開のうちに措定してゆく、ということである。すなわち、超歴史的な経済原則として、あるいは歴史的な産物として、Voraussetzen されたものは、資本がひとたび成立するやいなや、この論理的展開そのもののなかでふたたび Setzen される、ということである。いいかえると、「論理的」なものは、その非歴史的・歴史的・諸前提を自分の素材的内容として、これらを資本の原理によって包括してゆくのである。したがって、「論理的」なものと「歴史的」なものとが、統一されるというふうに解すべきではなく、むしろ非歴史的なものと歴史的なものとの相矛盾する両契機を、資本という歴史的形態としてより高次の経済学的範疇の立場で統一したものこそが、「論理的」なものだと解すべきであろう。

マルクスが、『綱要』の「序説」でのべている、経済学の方法としての「論理的方法にはこのような含蓄があるとみなければならない。ただしかし、おなじく「資本概念形成」の歴史的契機であっても、原始的蓄積過程は、商品経済的な「流通」とはちがって、資本の「定在」の諸契機の運動のうちにふたたびあらわれるということがない。それは「現実的な資本」のうちに消滅し・吸収され・止揚される。このことは、労働力の原始的な生成過程、または労働力商品化の本源的過程というものが、「資本」にとって「外的な・所与の・」過程としてあらわれ、そして、それが商品経済的ないみで合理性をもつ過程でなく、いわば経済外的な諸要因を主たる動力とする過程であることを、しめしている。このようないみで、原始的蓄積過程は、商品経済的な「流通」と自然経済的（人間社会にとって自然的・必要的といういみで、すなわち経済原則的ないみで）な「生産」一般が、いっそう発展した商品経済的形態としての資本の原理によって、統一されてゆくばあいの、特殊歴史的な媒介の役割をはたしている。

つぎに、われわれは、現行『資本論』のなかの「原始的蓄積過程」の章の分析に、すすまなければならない。以下は、そのかんたんな展望である。

現行『資本論』では、その第一巻のプラン内容は、いちじるしく拡大充実される。貨銀形態論が内容を充実して独立化し、資本蓄積論が導入されて独立の一篇をなす。この二篇が、それぞれ第一巻の第六篇、第七篇として、原始的蓄積論のまえに配置される同時に、この原始的蓄積論は、第七篇の資本蓄積論にたいする歴史的補足のようなかたちをとるにいたる。一方、原始的蓄積論じたいも、第一巻の二四章として、資本の論理的展開の本筋からのぞかれた事情を反映して、歴史的補足としての内容をいっそう具体的に豊富化してゆく。こうして、従来の原始的蓄積論にたいする理解の仕方にたいする「資本論」体系化のプロセスからみたかぎりでの批判的観点が成立する。この議論を、『資本論』全体の理論的完成だとみたり、第一巻のみが資本主義の歴史的発展を反映しているとみたり、あるいは純粋に経済的な要因のみから資本主義の発生をとこうとしたりするもろもろの見解にたいする批判。これらについては別稿にゆずる。

(1) さきにあげた、一八五八年二月二二日付のマルクスのラッサール宛の手紙にかかれている経済学プランの、第三項は、「経済学的諸範疇と諸関係の発展のかんたんな歴史的概観」となっている。原始的蓄積論を、この項にいれるならば、もっともすっきりしたかたちになる。だが、このプランは、明らかに、多くの点でのちに変更された。「資本一般」における「賃労働一般」の分析(Grundrisse, S. 702, S. 970)とは区別されたいみでの、特殊的・具体的な「賃労働」論の領域にいれるのが、適当だったということになるだろう。

(2) 『綱要』の「原始的蓄積」にかんする最初の準備ノートでの叙述、ブルジョア経済の運動法則を解明するための「方法」にふれている箇所(さきにあげた第二の項目、本書九ページ)を参照。

(3) 現行『資本論』第一巻二四章を参照のこと。

(一九五九・十二・二五)